

ペスタロッチーの宗教観と教育

——前期の実践と著作における——

野々村昇

本論に入る前に時期区分について一言しておかねばならぬ。前期とはシュブランガー (E. Spranger : Pestalozzi, Gedenkerede, gehalten auf Einladung der Universität Zürich, 1927, —Pestalozzis Denkformen, 3 Auf. S. 15) にならって 1792 年までを意味する。この時点で区切ったのは後期の最初の主著である「探究 meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts. 1797」の新方向性にかんがみてである。従って本論文の対象は誕生から「リーンハルトとゲルトルト Lienhard und Gertrud, 1781—87」までの時期である。

1

少年ペスタロッチーをめぐる環境の中で我々の主題との関連上顧慮を要するものは、母親スザンナと女中バルバラ、それにヘンクの牧師である祖父アンドレアス・ペスタロッチーである。母親の影響についてはしばしばルソーとの比較がなされる。ニコライはルソーが「エミール」の中で一般に生徒が十五歳になるまでは彼に宗教について話してきかせてはならないという見解を打ち出した背景に彼の育った環境における宗教的教育のもたらす祝福の欠如を指摘する。これに対しペスタロッチーは「彼の敬虔の最もよき部分を母親の敬虔な教育に負うている¹⁾」。又バルバラは主人なき後のペスタロッチー家に忠実に仕え、その犠牲的な愛は少年に深い印象を残した。チューリッヒ近郊の田舎で牧師をしていた祖父のもとへ、ペスタロッチーはよく訪れたらしい。そして教区の学校や病人や貧民達を訪問する祖父に同行することもあった。祖父は教区民に対して慈愛心の限りをつくした。この老牧師の姿が彼の牧師の理想像に強い影響を与えたりすることは容易に推察しうる。ガンはペスタロッチーの牧師志願はこの祖父の印象に負うところが大きいという²⁾ことを指摘する。

チューリッヒにある Collegium Humanitatis に進学したペスタロッチーはボードマー教授を

1) 父ヨハン・バプテストは1751年、ペスタロッチー五歳の時に死んでいる。モルフはペスタロッチーを育てた家庭の特色として男の影響が欠けていることを指摘する。

H. Morf: Zur Biographie Pestalozzis, 1865—89, 長田新訳「ペスタロッチー伝」第1巻85頁

2) W. O. Nicolay: Pestalozzis Stellung zu Religion und Religionsunterricht, 1920. S. 10

3) Roger de Guimps: Histoire de J. H. Pestalozzi, de sa pensée, et de son oeuvre, 1874, 新堀通也訳「ペスタロッチー伝」8, 9頁。

中心とする「愛国者団 Patrioten」に参加した。教授は敬虔を政治と結合させたと評される。⁴⁾ 愛国者団の目的はチューリッヒの若き市民の政治教育にあったので、彼らは週毎に集って教育的、歴史的、道徳的ならびに政治的の論文を批評した。しかし彼らは単なる研究団体にとどまらず、政治的不正などに対して弾劾活動を行った。ペスタロッターの最初の論文「アギス Agis, 1766」は直接的な批判ではないにせよ、やはり政治的改革意識の中で書かれたものである。⁵⁾ こうした政治的関心の増大とともに彼は牧師志願を断念し法律学の研究に向かう。

ところで 1766 年にはもう一つの論文が公けにされた。雑誌「エリンネラー」に載せられた「願望 Wünsche」がそれである。これは先のアギスとは趣を異にするもので、道徳的、教育的調子が支配的である。これは断片的な主張の羅列の如くであるが、その比較的多くの部分は淫猥さへの非難と清潔の希求にあてられている。彼は人間の欲情をあおるような小説、詩歌、絵画が流布し、それによって青少年の心が迷わされている実情を憂え、これらの絶滅を希望する。⁶⁾ ここにあられた不品行への嫌忌、厳格な清潔の要求は確かにペスタロッターの道徳観の主要な一部をなすものである。我々はやがて「リーन्हルトとゲルトルート」において彼の純潔教育の方策が紹介されているのに出会うであろう。「願望」においてはその方策はまず、画家、詩人、音楽家、小説家などが自分の才能を肉感的 Wollüstig な作品に用いないで、専ら「徳の促進と高貴な感情の覚醒鼓舞とにのみ向けるよう努力すること」である。⁸⁾ このように害悪を生産しないことと並んで必要なのは教育である。ここでは専ら善き事例による教育が考えられているようである。その事例は聖書の中の教訓に富んだ物語から、隣人の善き性質や改善についての報告から、祖国の歴史上の諸事件から採用される。⁹⁾ こうした教育は全ての人に必要であるから、ごく普通の市民や農民にも理解できる単純で善き教育原則を満載した印刷物が欲しいものである。これを無料又は廉価で配布できればもっとよい。¹⁰⁾

こうして政治への関心と教育への関心とはペスタロッターにおいて早くも並び立つ。¹¹⁾ しかし法律家政治家への道は彼が農民会話事件（1767年初め）に連座して政府の不信をかったことによつて当分閉ざされることになる。¹²⁾

4) Bonjour, Offer, & Potter: A short history of Switzerland, 1952, p. 206.

5) 梅根悟著「西洋教育思想史」, 1968, II, 149頁。

6) J. H. Pestalozzi Sämtliche Werke, herausgegeben von A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, Bd. 1, 1927, S. 26. (以下ペスタロッターからの引用は全てこの全集による。P. S. W. と略す)

7) その方策としては羞恥心の利用、健全な男女交際の風習、若者に結婚の条件を備えてやることなどが考えられる

8) ebenda S. 27

9) ebenda S. 26ff.

10) ebenda S. 28

11) Hans Barth: Pestalozzi's Philosophie der Politik, 1954. 杉谷, 柴谷訳「ペスタロッチ研究—教育・政治・経済・道徳の関連」 23頁参照

12) 「農民会話」はミュラーが「ジュネーヴ市民には政府を彼らの意志に従わせる権利がある」との主張を盛って作成した文書。当局が不穏思想として捜査にのり出した時、ペスタロッターは最も安全な方法として自首をすすめたがミュラーは逃亡し、ために彼は逃亡をうながしたという嫌疑をかけられる。結

彼が1767年秋に法律学の研究を中止して農業に移った背景にはかかる事情があった。しかし又積極的な理由も存した。即ち彼は師ボードマーや愛国者団に支配的であった重農主義 Physiokratische System を自らも信奉していたからである。「願望」の「私は農業の開発を望む¹³⁾」という言葉や、後のノイホーフの貧民施設からの報告における「私もまた農業を特に愛している。そして長い間工場産業には反感を抱いていた¹⁴⁾」といった発言がこれを示している。もっとも彼のリアリスティックな目はやがて農業だけの時代が終るであろうことを洞見するのであるが¹⁵⁾。

ベルンの農業家ヨハン・ルドルフ・チップフェリーの農場で一年間実習した後、彼はレッテンに土地を得、近くのミューリゲンに住居しながら農業を開始した。この農場はやがて彼がそこに新家屋を建築した時からノイホーフと呼ばれる(1771年)。農業開始一年後に彼はアンナ・シュルテスと結婚する。彼女の人となりは婚約時代の手紙(1767—69年)及び新婚時代の日記(1769暮—70年)からうかがい知ることができる。特質の一つを言うならば、彼女は祈りを重んずるということである。「工合よくいくという最も確実な方法は、神の意志に全く従うこと、絶間なく神に祈ることである¹⁶⁾」。祈りは多く朝に行なわれたが、これによって彼女は一日の心のそなえをなす。彼女において目立つことは厳しい自己反省と浄化の願いである。彼女は反省の有益性を確信しており(5月17日)、従ってこれの実行は日記の各所に見られる。彼女の反省の目は自分の激昂、性急さ、不満心などの心の静安を乱すものに向けられる。この反省は深い罪意識へと導く、かくして神がその罪を許して下さるようにとの祈りと、罪との戦いに勝利する力を与え給え、との祈りがこれに続く。(1月10日、18、19日など)

これとならんでいま一つの特質は摂理信仰 Vorsehungsglaube であろう。「私共は神の定め給うところをしっかりと身を受け、此の上の悪運を静かに待ち、此の不運もまた私共の祝福に役立つに違いないということを確信しようと決心した」(5月17日)。当時のペスタロッター夫妻は結婚に対するアンナの両親の反対という不運にやっと好転が見られたばかりの時に、早くも農場経営の困難という第二の試練を迎えようとしていたのである。この時にあたって夫妻を支えたものが摂理信仰であったということは首肯しうところであろう。この信仰を我々はノイホーフ貧民施設からの第二信からもうかがうことができる。「最後に、我々は一切の可能な配慮をした後は全知者の、すなわち人間の全能なる父の導きに安んじて身を委ねるべきである。——神の摂理は大なる者であれ小なる者であれ彼ら一切を包むのである¹⁷⁾」。

かかる宗教的態度を新婚当初のペスタロッターがある程度妻と共有していたことは十分推測し

局禁固中の費用の弁済を申し渡される。モルフ第1巻119—127頁。

13) P. S. W. Bd. 1, S. 31

14) ebenda S. 158

15) ebenda S. 158「農業はもはやいたるところで貧民のための十分な財源ではなくなっている。あちこちで設立された産業が方々で貧民の生活源としての工場産業に彼らを向かわせた」

16) ebenda S. 39. 尚日記の引用は玉川ペスタロッター全集所収の福島政雄訳によった。他のペスタロッターの著作に関しても玉川、平凡社、両邦訳ペスタロッター全集を参照したことは言うまでもない。

17) ebenda S. 165

うるが、デリカートは既に結婚当初から妻の宗教的態度に対する批判が夫において存在したと推測する。それは妻の不自然な敬虔 etwas forcierte Frömmigkeit の中に狂信 Schwärmerei の危険を見たからだという¹⁸⁾。ペスタロッチーにとって狂信は偶像礼拝を生みやすいが故に極めて危険である。「あらゆる宗教団体は彼らがたずさわる事柄に含まれる人間的なものを、愛する神に結びつけ、そのために彼らはそれ自体誤っているものまでも神聖なものとして尊崇せざるをえないことになるのです¹⁹⁾」。しかしこの批判が妻に向けられていたという確証はない。

2

1774年冬からペスタロッチーのノイホーフ貧民学校の試みが始まった。彼の中に既に早くから教育への関心が存したことは前述した通りであるが、彼は今や自らがその実践者となるのである²⁰⁾。ノイホーフの貧民教育の理念と実情を知らせるものに「田舎の家で貧困児童に教育と労働を授けるための一施設を善意をもって後援していただくための、博愛家ならびに後援者への依頼」(1775年)「貧しい田舎の青少年の教育についての N. E. チャルナー宛書簡」(三通あり。Ⅰ信、Ⅱ信、Ⅲ信と略す。いずれも 1777 年)、「最下層の人間の物語からの断片」(「Geschichte」と略す。1777 年)「ペスタロッチー貧困児童教育施設についての信頼すべき報告」(1778 年)がある。

施設に収容された子供たちは、それまで乞食をしていた者が相当数あり、そうでない場合は家庭の貧困のために全く放っておかれたのだった²¹⁾。これらの子供たちは身も心も衰弱しきっている。彼らは無秩序な生活に慣れて放縦で怠惰である。粗暴で着着きがない。生きる勇気を失っている。

こうした子供たちをペスタロッチーはどこへと教育するのか。彼は貧民教育の目的を乞食根性からの決別に置いたと言えよう。「貧民は多くの場合、彼が自分の必要物を獲るように教育されていないが故に貧しいのである。我々はここでこの源をふさぎ止めるべきだ²²⁾」。彼は貧民に施し物を与えるだけの慈善事業は貧民の乞食根性を助長するからかえって有害だと判定する。「確かに言うことは、慈善 Allmosen はそれを受ける者をして、もはや乞食をする必要がないようにする時にのみ真の慈善であるということだ。——これは本当である。さもないと慈善は知恵と善との献身ではなく、それとは別のものになる²³⁾」。かかる独立を実にこの世の最下層の人間、極貧の人間にまで例外なく要求した点に我々はペスタロッチーの特質を見るべきである。彼が貧

18) Friedlich Delekat; Johann Heinrich Pestalozzi——Mensch, Philosoph, Politiker, Erzieher, 3 Aus. 1968, S. 225f.

19) P. S. W. Bd 3, 1928, S. 355

20) ガンはペスタロッチーにこの企図を促したものは息子ヤーコブの誕生であるという。すなわち息子誕生時の不安が彼に罪の自責を促がし、それまでの自己と自己の家庭のみを配慮する利己的傾向に対する反省と回心を導いたと考える。(ガン63頁)。

21) P. S. W. Bd. 1, S. 176

22) ebenda S. 142

23) P. S. W. Bd. 3, S. 208

民の友となる方式はかくのごときものであった。

さて乞食根性にかわるべきは勤労精神である。怠惰はこの精神のまっこうからの敵であるので怠惰の警戒は彼の著述の随所に見られる。リーンハルトとゲルトルートでは教師のグリューフイーが生徒の怠惰を矯正するために作業の罰を与えている。²⁴⁾更に貧民の場合には将来、楽で快適な任事につく可能性はまずない²⁵⁾のでかなり苦しい条件下での労働を想定して、それによく身を律していくことの訓練が積まれるべきである。たとえば、すきまから入り込む寒気も、閉め切った部屋のむっとする暑さも、かたいベッドも彼らの健康にさしさわってはならないのである。彼らにはこれに耐える強健さが要求される。一方エコノミー（家計術とでも言おうか）も彼らが備えるべき大切な資質だ。わずかの捧給で生計をたてるためには倹約は必須である。彼らに落ち着いた計算と工夫の才能が得られるならば、彼らの生活はたとい収入は少ないといえどもそれなりの豊かさを保つことができよう。倹約を語る時のペスタロッチーの脳裡には、少年時代、苦しい家政を賢明に切りもりし、少年に不足感を与えないように努力した、あのバルバラの姿が想起されていたのかも知れぬ。以上要するに「敢しい、必要にせまられての鼓舞された勤勉の精神 Emsigkeit」, 「正確で極めて細心な倹約精神 Sparsamkeit」, 「最も困難で卑しい活動にもまけない訓練 überwindende Übungen」がこの種の施設の基調となるべきである。²⁶⁾

Ⅱ 信では工場主が子供たちをひきとって彼らを働かせながら同時に教育をするという提案がなされている。彼はこのことが十分可能であることを示すために、子供は六歳にもなれば工場で働き得ることを保証し、彼らの労働から得られる収入と彼らの養育費との収支が工場にとって損にならないようにつりあうことを試算している。しかし教育の専門家でない企業家が同時に教育者であることは大きな困難を予想させるので後のリーンハルトとゲルトルートではむしろ教育施設の方に労働がとり入れられている。

およそこのような理念のもとにノイホーフ貧児院は運営されたといえる。具体的プログラムとしては、木綿の糸紡ぎという労働と、読み、書き、算ならびに農業に関する知識の教授、それに宗教教育が行なわれた。宗教教育は子供たちが善悪の審判者なる神を信ずるならば、この信仰は彼らを勤勉と誠実に導くだろうとの期待からなされた。²⁷⁾すなわち宗教教育は道德教育と一つだった。その方途はどうかというと、「私の道德教育の方法は多くの場合教師のそれではない。それは家の父の参与的教育 theilnehmender Unterricht であり、私が彼らと、彼らが私と分けもっているところのたえず訪れる機会を捕えての教育というべきであろう」と言われているところから明らかなように事態に即応せる教育であった。又「心によってのみ心は導かれる」²⁸⁾とか、「私の²⁹⁾

24) ebenda S. 181

25) きわめて現実的な目。但し彼は苛酷な工場経営を是認しているわけではない。(P. S. W. Bd. 1, S. 159)

26) P. S. W. Bd. 1, S. 146.

27) ebenda S. 161

28) ebenda S. 179

理想の可能性は全くもって、純粹に心からの（子供たちの）父への関係 Vaterverhältniss に基³⁰⁾くにちがいない」といった表現は道徳教育における愛と信頼関係の重要性を知らせる。

ペスタロッチャー夫妻の努力にもかかわらず、貧兒院はいきづまった。長い乞食生活に慣れて労働への熱心をおこさない子供たちの低い生産性、子供が少しでもかせげることを知ると家に帰ることをそそのかす親たちの忘恩のため（Ⅱ信）、更には生産物の取引方法のまずさ（モルフ）により経済的に立ちいけなくなったからである。しかも政府その他の援助はなかった。こうして事業は 1780 年をもって閉じられることになる。

3

事業中止後の傷心のペスタロッチャーを励ました者にバーゼルのイゼリンがある。雑誌「エフエメリデン」の主筆をしていたこの人はペスタロッチャーの能力をよく理解し、彼に文筆業をやるように鼓舞した。「隠者の夕暮 Abendstunde eines Einsiedlers, 1780」はこうして執筆され、最初「エフエメリデン」誌上に発表された。

「夕暮」を通読して気づくことは S. 272 (P. S. W. Bd. I) までは「自然」という語が多く、「神」ないし「信仰」という言葉はほとんど皆無であるのに S. 273 以後は「神」と「信仰」のラッシュともいえるべくこの語の頻繁な使用が見られるということである。そこで便宜上この二段に区切って、その言わんとするところをそれぞれ探ってみることにしよう。

前半において、まず人間が真理を知る必要が説かれる。この場合、真理とは「人間に必要なもの³¹⁾」、「人間を高貴にするもの³²⁾」、「人間を強くするもの³³⁾」のことである。あるいはこれを「静安であり生の幸福の享受であるもの」、「人間の内奥に満足を与えるもの」、「人間の能力を発達させ、その日々をはれやかにし、その年々を幸福にするもの³⁴⁾」と言いかえることができる。このような真理をペスタロッチャーは具体的には何だと考えていたのだろうか。それは主として義務という言葉で表わすことができるのではあるまいか。「全ての人類は、君主も臣民も、主人も下僕も彼らの最初の自然関係を享受することによって彼らの身分のそれぞれの義務へと陶冶される³⁵⁾」すでにこの引用からもわかるようにペスタロッチャーは国民の義務と上位身分の者のそれとを区別する。まず前者の義務は自分の職業にはげみ、国家 bürgerliche Verfassung の課する重荷を背負うことである。彼らに求められる徳性は信頼と服従ということである。「上位者の不信仰は下位者の不服従の源泉である」などの言葉からこれをうかがい得る。かかる徳性が「子ごころ Kindersinn」と

29) ebenda. S. 160

30) ebenda S. 180

31) ebenda S. 265

32) ebenda S. 266

33) ebenda S. 275 f.

34) ebenda S. 271

35) ebenda S. 278

呼ばれるものの本質である。他方上位者の義務は国民がささやかながらも家庭の幸福を楽しむことのできるような政治を行ない、又国民をそのような生活に向けて教育することである。³⁶⁾その徳性は慈愛である。これが「親ごころ Vatersinn」の意味するところである。³⁷⁾従って人類が是非とも探求すべき真理とは親ごころと子ごころなのである。

しかし前半部の多くを占める自然的教育の叙述からわかることは、この真理は又知識及び技能をも含んでいるということである。それはこれら知識や技能が幸福な家庭の維持に必要なからである。従ってそれは博識である必要は少しもない。むしろ「自分の最も身近な状態についての知識と自分の最も身近な要件の訓練された処理能力という堅い土台の上に立てられた」³⁸⁾真の人間の知恵 reine Menschenweisheit ³⁹⁾こそが必要なのである。このような知恵の獲得に際しては急いではならぬ。一步一步とばさず、確実に進むべし。又その教育方法としては彼らの力を実際に使うことが有益である。⁴⁰⁾

ところであの親ごころ、子ごころはいかにして陶冶されるか。それをうかがい得る箇所は前半部ではわずかに一箇所だけである。しかし重要であるので引用しておく。「満足せる乳呑子は、この道（乳を与えられるというこの道——引用者註）をとおって、彼の母が自分にとって何であるかを知る。そしてこの道が、この乳呑子がまだ義務とか感謝とかいった言葉を聞かされる前に、感謝の本質である愛を彼の中に形づくるのである。又父とともに父のパンを食しながら、かまどであたたまっている子供は、この自然の道をとおって、子供の義務の中に自分という存在の幸福があることを知る」⁴¹⁾。従って親が子供に幸福を味わせるということが子ごころを陶冶する自然の道なのである。ペスタロッターは人間の内に存する子ごころへの端著を確信している。親ごころへの教育は前半部では説かれない。

後半部で何故「神への信仰 Glauben an Gott」が出てきたか。この理由もまた上位者と下位者として異なっているように思える。下位者にとって神信仰が必要なのは特に苛酷な境遇下で意気消沈しないためである。「あなたの柔軟で善良で感受性をもつように陶冶された本性といえども暴力や墓や死に神なしで耐える力はもちあわせていない」⁴²⁾。かかる苦境を忍耐させるものは、永生への希望 Hoffnung des ewigen Lebens」⁴³⁾「不死への信仰 Glauben an Unsterblichkeit」⁴⁴⁾をおい

36) ebenda S. 276

37) このように見てくるとこの段階のペスタロッターはなお上位者の愛に期待していたことがわかる。尚、愛は下位者にも要求されるがそれは信頼と感謝とをその内容とする (ebenda S. 266)

38) これを表わす表現としては「自然の道にのっとり auf dieser Bahn der Natur」, 「自然的教育方法 Lehrart der Natur」などが使われる。

39) ebenda S. 266

40) ebenda S. 269

41) ebenda S. 266

42) ebenda S. 273

43) ebenda S. 274

44) ebenda S. 275

て他にない。我々はノイホーフのペタロッターに摂理信仰を見たのであるが、永生信仰はそれを更に突き進んだものと言わねばならぬ。しかしこのことによって彼は単なるあきらめを説いているのではない。彼の人間愛と正義心は被抑圧者への憐憫から抑圧者への非難に向かう。「義務」という言葉が断然多く上位者に向けられているのは彼らが義務を遂行していないからである。親ごころはいったいどこへ消えてしまったのか。信仰は上位者においては親ごころ回復の手だてであった。「神は人類の父であり、人間は神の子供であるということ、これこそ信仰の真の主題である⁴⁵⁾」と言ったペタロッターの意図は神と人間との親子関係を模範として上位者もまた下位者の父となってほしいという点にあった。「神の似姿 Bild der Gottheit である君主の身分は国民の父であるということだ⁴⁶⁾」このように見てくると冒頭の句は真にこの書の主題を成すものであることがわかるであろう。

最後に、あの子ごころを陶冶する自然の道が、信仰への教育においても採用されていることに注意しておこう。⁴⁷⁾

4

小説「リーンハルトとゲルトルート」はこれに先立つ「夕暮」やノイホーフの実践報告と多くの共通点をもっている。まず貴族政治への期待が維持されている。領主アーナーは言う、「君主や貴族に対する神の掟はこうだ。すなわち彼らの富は彼らのものではなく、彼らはその国民たちに与えうるものはこれを与えて守り完成してやり、彼らが国民に与えるものを国民が利用し、更には子孫に残すように教えるために君主又貴族なのだ⁴⁸⁾」。国民の幸福はこのような慈愛に富んだ父としての君主にかかっている。もっとも第4部ではアーナーの危とくに際して国民の自立の決意が見られる。(§32) 次に我々はゲルトルートの居間の教育(第2部§22)やこれを採用したグリューフイーの学校(第3部§64)を見る時、あのノイホーフにおける労学並存の教育を想起する。ノイホーフにおいてと同じく、ここでも子供の将来の境遇によく身を処する資質が教育の目的である。「子供は将来成人した時に自分のものとなる財産を十分大切にし、秩序正しく扱って自分と家族との幸福のために用いることを学ぶ時にはじめて真によく教育されたといえる⁴⁹⁾」。グリューフイーはこのような意識のもとに労働の汗と疲労による職業教育を言葉の教授 Wortunterricht に先行せしめる。あの「行なうこと」による教育である。

紡績業が侵入したことによって変わったのは職種だけではない。村の風俗、習慣も変化した。牧師が詳細に述べた悪代官フンメルのおいたちの記はこうした変化の指摘を含む。それによればこ

45) ebenda S. 275

46) ebenda S. 276

47) ebenda S. 274「一切の信仰を幸福の享受と経験の上に基づけるのが自然の力である」

48) Spranger 前掲書 S. 39.

49) P. S. W. Bd. 2, S. 281f.

50) P. S. W. Bd. 3, S. 51

のころでは村に背あった健全な男女交際の良風が消滅した。昔は青年男女が会合する場合、必ず両親や立派な信仰の人が同席した。又求婚する若者は自分の高潔と善良を実践によって示さなければならなかった。ところが今は激情にまかせての不品行が横行している。又コーヒーや砂糖や立派な織布といったぜいたく品が農民の家政を破壊した。第4部でアーナーが特に心にかけてた道德問題は盗みと不品行であった。（§54, §55）こうして職業陶冶とならんで道德教育が緊急の課題となる。「そして又彼はこの職業陶冶と道德教育を結びつけた⁵¹⁾」。この道德教育をグリュエーフィーももちろん行なっている——村の歴史からの教訓を通して——が、領主も牧師もそれぞれの役職においてこれをたすけている。このようにボンナル村では政治、教育、宗教は協力関係にあり、各自に出来る範囲で、同一目標に関与する。「アーナーは真の賢明な立法の窮極目的が真の賢明な宗教の窮極目的と一致していることを知っていた」⁵²⁾。「彼は宗教の教えを彼の立法の仕事の要石にした」⁵³⁾。この同一の目標とは上述の品性をも含むところの勤勉な産業精神であろう。ペスタロッターは宗教改革をもそれがかかる精神の源となりえたという点で高く評価している。

さて宗教教育はゲルトルートの居間においては祈りと結びついた毎土曜日の反省会として行なわれた。（第1部§31）それは子供たちの悪い癖を早い時期に見つけ出して矯正するためだった。聖日には両親が教会へ行っている間、居間に集まって祈り、歌い、その週に習ったことを復習するのが日課であった。（第1部§47）

牧師の宗教教育は少尉が学校を設立して後は、この学校の目的である静かで勤勉な職業生活に導くことを主な目的とする。従って宗派間の論争問題の暗記などは無意味なことだと思われた。彼の説教はできるだけ子供たちの行動や境遇や義務に結びついて語られる。（第3部§66）牧師は又大人や若者に対しても説教壇から語ることだけが彼のつとめだとは思っていない。人々は牧師と会話しながら牧師の言わんとするところを理解していかなければならない。（第4部§60）祝祭日の夕暮には老人から孤児にいたるまでの全教区民の反省会が教会で行なわれる。そこでは牧師自身が率先して自己を反省する。次いで村役人、老人……というように順に反省する。（第4部§61）以上で気づかれるように宗教教育はまたしても道德教育と一つなのである。

5

テオドル・リットは「探究」を手がかりにペスタロッターの生の特質をとらえようと試みてその成果を「プロテスタント的な歴史意識の表現としてのペスタロッターの人間論⁵⁴⁾」という論文にまとめた。その言うところをまず聞くことにしよう。リットはこの論文を「プロテスタント・キリスト教は此岸 Diesseit に対していかなる態度を取るべきか」という問をもってはじめる。これに対して通常聞かれる議論は二者択一論である。すなわち我々の此岸に対する態度には次の

51) ebenda S. 168

52) ebenda S. 419.

53) ebenda S. 427

54) Theodor Litt: Der lebendige Pestalozzi, 3Auf., 1966 所収

二つの道、此岸を光輝化して Weltverkörperung この完成に没頭するか、それとも此岸は空虚だとしてこれの改善には手をそめないかの二つしか選択肢はないと考えるのである。もしこの二つしか取るべき態度がないとしたらキリスト教は後者を取らざるを得ない。何故ならキリスト教は最もよくこの世の有限性を知っているからである。しかしこうした二者択一論は誤っている。何故ならもう一つの可能性を無視しているからだ。それは此岸の有限性を認めながらも尚これの改善のために努力するという態度なのである。ペスタロッチャーはこの道を歩んだ。「断念的あるいは絶望的な拱手傍観、敬虔心によって絶望的なこの世の困苦をかなたにおいやること、こうしたことほどペスタロッチャーから縁遠いことはない。それとは逆にこの稀有なる人、自己自身について「愛がその本性であり、誠実がその最も強い傾向」であったこの人の生の歌からは無類の反抗的な Dennoch (にもかかわらず) がひびきわたる⁵⁵⁾」彼は「環境ないし自分の天才が自分を行為へと召喚するところではどこでも、あたかもこの世は自分の尽力にかかっているかのごとくに手をさしのべておきながら、自分に委託された仕事から解放されると自分の又一切のこの世での努力の有限性を何の弁解もなしに認めるようなそういう人間⁵⁶⁾」であった。

人間の有限性、二義性 Zweideutigkeit は「リーンハルトとゲルトルート」においても、事態の進展とともに深く自覚されていくのを我々は見ることができる。悪は単に悪玉だけの所有物にあらず、人間普遍的傾向性であることが意識されていく。かくしてこの自覚は「探究」において徹底せしめられる。一方此岸改善への熱意は我々の見た前期においてすでに十分にうかがわれるところである。そして実はこの改善への熱意が他の一切の関心に優越していた点に前期ペスタロッチャーの特質があるといえる。こうした彼の生の特質は当然ながら彼の宗教観にもあらわれる。宗教の知識に通じた能弁家で時にその能弁を悪のために使用するハルトクノッパが非難されているのは当然であるが、敬虔なルーディの妻もまた彼女が祈りと書物には通じているが実生活の能力を持とうとしなかった点で批判されている。要するに前期のペスタロッチャーにとって宗教はそれがこの世の義務——それも各人の境涯にふさわしい各人の義務——を促進する限りにおいて高い評価を得るが、それが義務を軽視させる働きをする時には断然批判の対象となるのである。かかる此岸中心の宗教観が我々の見たペスタロッチャーの特質であったと言えよう。しかしこの期の著述においてプロテスタンテズムの出発点たる信仰義認の論述がほとんど見られない(宗教改革への言及についてはすでに見たごとく、それが義務の促進に果した貢献にのみ注意が向けられている)ということはこれもまた彼の宗教観の特質として指摘しておかなければなるまい。

(大学院博士課程)

55) ebenda S. 52.

56) ebenda S. 60